

# 方言の実践的調査・観察方法の観点からみた「大阪のおばちゃんことば」を用いたワークショップの評価

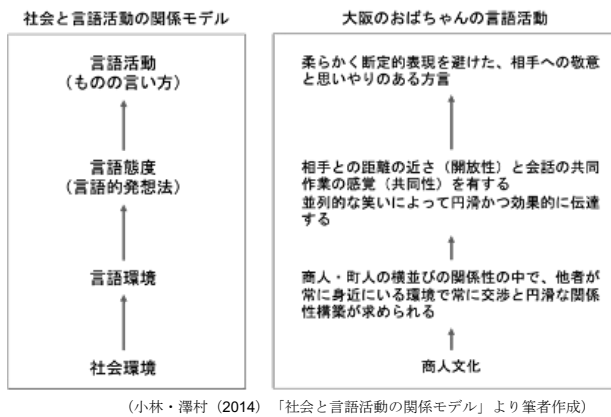
長谷川 霞(京都芸術大学)

## 1. 研究目的

方言の社会的位置付けは、近世から現在に到るまでコミュニケーション媒体や社会環境の中で変化を遂げ続けている。特に現在においては、アクセサリとして方言が使われるなど、方言使用は活発化の状態とも言える。中西(2017)は、言語行動の地域差は、ほぼ無意識のうちに行なっている些細な言語行動や、日常行う言語行動に現れうが、調査の着眼点として挙げづらい部分もあるため、専門家に限らず世間の多くの眼を通して得た意見を参照するのも1つの方法だと指摘している。ここに依拠するとき、大阪のおばちゃんのお節介は、「多くの人の目にとまる特徴的な言語行動」として着目に値するだろう。筆者らが開発した「大阪のおばちゃんことば」を用いたワークショップを通じて、方言がどのように受け入れられ利用されていくのか、またワークショップ自体が言語行動調査方法の中においてどのような位置付けにあるのかを明らかにする。

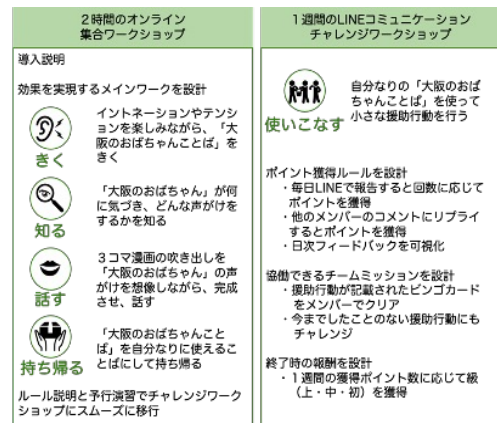
## 2. ワークショップを通じた方言の受容・利活用の評価

筆者らは「大阪のおばちゃんことば」を用いて小さな援助行動を促すきっかけをデザインする、ワークショップを開発した<sup>1</sup>。「大阪のおばちゃんことば」を体験・体感し、自分なりの「大阪のおばちゃんことば」を発見することで日常の援助行動が促進されることを目指した。



(小林・澤村 (2014) 「社会と言語活動の関係モデル」より筆者作成)

(図1) 大阪のおばちゃんの言語活動



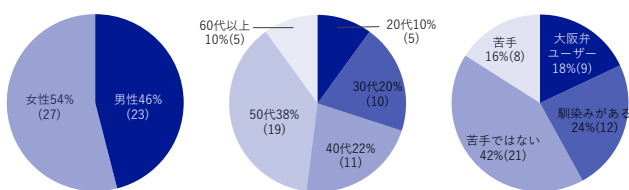
(図2) ワークショップ概要

大阪(関西)方言の特徴に関する先行研究では、小林・澤村(2014)「社会と言語活動の関係モデル」にて地域の社会環境が地域特有の具体的な言語活動として現れることが明らかにされている。これを大阪のおばちゃんの言語行動と照らし合わせると、図1の通り、大阪の商人文化・笑いの文化が、断定的表現を避け、柔らかく、相手への敬意と思いやりのあるものの言い方(方言)として表出していると言える。これを踏まえ8つの「大阪のおばちゃんことば」<sup>2</sup>の抽出を行い、ワークショップの骨格とした。ワークショップ構成は「大阪のおばちゃんことば」を音として「きく」、大阪のおばちゃんの言語行動を「知る」、大阪のおばちゃんならどのように話すだろうと想像しながら「話す」、自分なりの「大阪のおばちゃんことば」にアレ

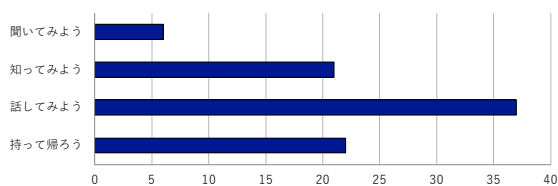
<sup>1</sup> <https://graduate.air-u.kyoto-art.ac.jp/art/ids/study/760/>

<sup>2</sup> 「どこ行くん、一緒(い)こか」「どないしたん」「なんとかなるよ」「かまへん、かまへん」「ちよつと助けたって」「飴ちゃんあげるから泣いたらあかんで」「えらいこつちやなあ、しゃあないなあ」「そこ気いつけやあ」

ンジして「持ち帰る」2時間の集合ワークショップと、参加者同士がLINEコミュニケーションをとりながら「使いこなす」1週間のチャレンジワークショップの二部構成とした。



(図3) 集合ワークショップ参加者属性



(図4) 集合ワークショップにおいて自身の変化に影響のあったワーク

計14回(2022年12月~2023年8月)、20代~60代以上の計50名(男性23名,女性27名)へワークショップを実施。ワークショップ全体を通じ72%の人が今後も継続して「大阪のおばちゃんことば」を用いて声かけが出来ると回答した。大阪弁に対する近しさについても、図3の通り、日常的に使用している人(大阪弁ユーザー)から苦手と感じる人まで参加しており、本ワークショップが方言話者以外にも効果があることが明らかとなった。特に演劇的要素を取り込み、日常生活の3コマ漫画の吹き出しを埋めることで、大阪のおばちゃんの声かけを再現し追体験する「話す」ワークが、図4の通り、受容に最も効果があった。

また、「大阪のおばちゃんの行動を知り、周りの些細なことにも気が付くようになり、声かけしようと思えるようになった」などの参加者からの発言もあり、大阪のおばちゃんがどのような行動を取るかを参加者が認識し、大阪のおばちゃんマインドを獲得する片鱗も見られた。本検証における参加者のうち大阪弁を日常的に使う人は18%であり、それ以外の72%は方言話者ではない中においては、「知る」ワーク・「話す」ワーク・自分が日常的に使う表現と比較しながら「持ち帰る」ワークを通じて、音や文字面としての差異だけでなく、その背後にある言語態度を理解し、参加者自身の出身地域とは異なる方言を受容していたと言える。これは先述の「社会と言語活動の関係モデル」と照らし合わせると言語表現に寄与する言語態度を参加者が理解・体得した状態と整理できる。

### 3. 言語行動調査法における本ワークショップの位置付け

先述のように、ワークショップを通じて方言がアクセサリ的に参加者に受容されたことが検証されたが、その過程を言語行動調査法の観点から、紐解いていく。

言語行動の調査方法については、中西(2017)が言語行動調査の6つの観点<sup>3</sup>と5つの調査方法<sup>4</sup>の相性と特性を整理している。中西(2017)による言語行動調査の観点と本ワークショップでのワーク内容を突合すると、表1のように整理でき、集合ワークショップはロールプレイ調査、内省調査、アンケート調査の複合形と言え、本論では「ワークショップ調査法」として論じていきたい。

(表1) 各種調査法と言語行動調査の相性—本ワークショップとの関係—

	集合ワークショップ	チャレンジワークショップ
言語行動の自然さ	✓ 3コマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており、ロールプレイ調査同等の調査が可能	✓ 自然観察調査に近い調査が可能 ✓ ただしLINE上での自己申告のため、集合ワークショップでのロールプレイよりは自然な言語行動の観察が可能だが、純粋な自然言語観察には劣る
言語行動の展開	✓ 3コマ漫画を使って言語行動をロールプレイしており、ロールプレイ調査同等の調査が可能	✓ 自然観察調査に近い調査が可能 ✓ ただしLINE上での自己申告のため、集合ワークショップでのロールプレイよりは自然な言語行動の観察が可能だが、純粋な自然言語観察には劣る
参加者の意識	✓ リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化しており、定性的にデータの取得が可能 ✓ ワークショップの中で、設定を変更することで、話者の意識による回答パターンの違いを調査することができる ✓ ワークショップ後のアンケート調査を通じた確認も可能	✓ リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化しており、定性的にデータの取得が可能
参加者の属性	✓ ロールプレイ調査同等の相性	✓ ロールプレイ調査同等の相性
場面の網羅性	✓ 対象場面をワークショップ内でコントロールしており、狙った場面の調査が可能 ✓ 参加者はワークショップへ参加している意識のため、自然にデータの収録が可能(参加者の心理的負担が少ない)	✓ 対象場面をワークショップ上で絞っているため、対象となる場面のみが申告されてくるため、データの取捨選択が不要
多人数調査との相性	✓ 多人数調査には不向き	✓ 多人数調査には不向き

(中西(2017)を基に筆者作成)

<sup>3</sup> 言語行動の自然さ,言語行動の展開,参加者の意識,参加者の属性,場面の網羅性,多人数調査との相性

<sup>4</sup> 自然観察調査・ロールプレイ調査・面接調査・アンケート調査・内省調査

集合ワークショップは、ロールプレイ調査（シナリオなし）方式に近い手法と言える。先行研究においても、井上を中心とした（2014）「方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書」にてロールプレイを採用し、会話データベースを「行為的機能」と「機能的要素」の観点から、比較検討を行ない、各地方言の談話構造や談話展開の違いを明らかにしている。これらの先行研究で利用されているデータは、ロールプレイ形式で会話・収録された会話データのみにとどまっており、発話者の意識についてはデータの取得、分析はなされていない。

これに対して「ワークショップ調査法」は、「参加者の意識」の観点で大きな差を有していると言える。「参加者の意識」の観点は、中西（2017）では「対話相手への親疎意識などを問う参加者の意識」であり「この点を探るのに最も適しているのは、自分の意識を顧みることができる内省調査」であると整理されている。この観点を親疎意識に限らず、文字通りの「参加者の意識」に重きをおいて捉えると、本ワークショップでは、ワークショップ内でのリフレクションや参加者同士の相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、それらが言語化されるため、定性的なデータとして「参加者の意識」を収集することができると言えるだろう。さらに、内省調査に比べて、これらのデータはワークショップ内でリアルタイムに発言されるものであり、後からその時の意識を振り返る内省調査よりも、より新鮮な情報と考えられる。これらは特に「話す」ワークにて見られたものだが、「持ち帰る」のワークにおいても、自分自身が日常的に使うものの言い方と方言でのものの言い方を照らし合わせる。自分なりの表現に置き換える中で、「大阪のおばちゃんの方が、ポジティブで前向きな表現で励まされる感じが強い」など、それぞれのものの言い方がどのような言語態度から表出しているのかを内省、理解を深めていた。つまり、渋谷（2003）が「言語行動の分野の課題」において指摘している「なぜそのような行動がその場面や社会で採られるのかという解約や説明（whyの問題）に言及するものが少なかった」という課題に対して、本ワークショップでは、参加者自身の言語行動のリフレクションが、参加者同士の対話として表出されることで一定の説明力を持たせることができていると言えるのではないか。

（表2）各種調査法と言語行動調査の相性—特徴—

	特徴
言語行動の自然さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 自然観察調査では非言語表現についても自然なものを記録できる</li> <li>✓ ロールプレイ調査は、実際にその場面の言語行動を相手と交えて演じる、という点で、意識上で振り返る面接調査とは一線をかくし、自然観察調査に準じた自然な言語行動が得られる</li> <li>✓ <b>ワークショップ調査は、ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える</b></li> </ul>
言語行動の展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 自然観察調査・ロールプレイ調査どちらも、実際に対話相手となる人物がいて、やりとりが行われるため、自然に言語行動を展開する（させる）ことができる</li> <li>✓ <b>ワークショップ調査は、ロールプレイ調査と同等の相性を有していると言える</b></li> </ul>
参加者の意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 自然観察調査は、単体では会話参加者間の親疎意識などを捉えるのが難しい</li> <li>✓ 内省調査は、自分の意識を顧みることができる最も適切な方法</li> <li>✓ <b>ワークショップ調査は、リフレクションや相互コミュニケーションを通じて、自身の意識を顧み、言語化するため、観察が可能となる</b></li> </ul>
参加者の属性	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ アンケート調査・面接調査が優れている</li> <li>✓ ロールプレイ調査は、社会的属性のみならず、ロールプレイ調査への適性も考慮に入れる必要があるため、条件の揃った人物を見つけ出すのが難しい</li> <li>✓ 自然観察調査は、観察地点をずらすことでターゲットの属性の調整を試みることができるが、労力・時間がかかる</li> </ul>
場面の網羅性	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 内省調査は、自分の思い起こすままに様々な場面の言語行動を採取でき、網羅性に優れている</li> <li>✓ 面接調査・アンケート調査は、体系的に設問化し、網羅的に尋ねることが可能である</li> <li>✓ ロールプレイ調査では、1つ1つの場面の収録に時間がかかり、場面を網羅するには多くの時間を要する上、収録に協力的な話者が必要となる。</li> <li>✓ 自然観察法では、狙いの場面がうまく生起するかの問題があり、網羅することが困難である</li> <li>✓ <b>ワークショップ調査では、対象場면을ワークショップ内でコントロールすることが可能な上、参加者はワークショップへ参加している意識のため、自然にデータの収録が可能（参加者の心理的負担が少ない）</b></li> </ul>
多人数調査との相性	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ アンケート調査が有効である</li> <li>✓ 自然観察調査やロールプレイ調査は、時間・労力がかかる</li> </ul>

（中西（2017）を基に筆者作成）

（表3）各種調査法と言語行動調査の相性

	自然観察調査	ロールプレイ調査		面接調査	アンケート調査	内省調査	ワークショップ
		シナリオあり	シナリオなし				
言語行動の自然さ	◎	△	○	△	△	×	○
言語行動の展開	◎	◎	◎	○	○	△	◎
参加者の意識	×	○	○	◎	◎	◎	◎
参加者の属性	△	○	○	◎	◎	×	○
場面の網羅性	×	△	△	○	○	◎	○
多人数調査との相性	△	△	△	○	◎	×	△

（中西（2017）を基に赤枠部分を筆者加筆作成）

上記を踏まえ、言語行動調査におけるワークショップ調査を他の調査方法と比較すると、ワークショップ調査は「言語行動の自然さ」と「言語行動の展開」においてロールプレイ調査と同等の相性を有している。参加者の意識については、内省調査が最も適していると整理がなされて

いるが、ワークショップにおいては、内省したことを、参加者同士の会話やコミュニケーションを通じて、リアルタイムに発話されることから、内省調査と同等の相性を有していると言えよう。最後に場面の網羅性に関しては、ワークショップ主催者側が対象場面をコントロールすることができるため、狙った場面での調査が可能と言える。恣意的に網羅的に場面設定が可能な上、言語行動の自然さと展開もロールプレイ同等の自然なものを取得することができる。

これらを更に中西 (2017) にて整理されている言語行動の調査法に並べてみると、表3のように「ワークショップ調査」は、言語行動の意識・言語行動の展開に強みを有し、ロールプレイ調査と内省調査の良さを併せ持つ調査方法と評価できる。本ワークショップは、方言習得のプロセスならびに、言語行動（ものの言い方）と言語態度（言語的発想法）の過程を明らかにする調査としても機能していると言えるのではないかと。

#### 4. 結論

ワークショップ参加者は、大阪のおばちゃんという特徴的かつ日常的な言語行動を、きく、知る、話す段階を経て、表面に現れる言語表現だけではなく、根底にある言語態度を理解・体得していることが検証された。また、その過程がワークショップでの発話や内省から明らかとなった。

言語行動調査方法の観点からは、本ワークショップは複合的な調査方法であり、特にロールプレイを通じた自らの言語行動に対する内省が得られている点は、言語行動解釈の妥当性を高めることに寄与している。当該ワークショップは「大阪のおばちゃんことば」のみでの検証となっているため、異なる方言においても「きく」「知る」「話す」「持ち帰る」ワークを通じて、言語行動（ものの言い方）と言語態度（言語的発想法）の過程が明らかになるのではないだろうか。ワークショップ調査法が言語行動調査の新たな方法として体系化、確立化するためには、更なる事例の積み上げが必要となる。

また、本論では集合ワークショップに焦点を当て「ワークショップ調査法」としての可能性に触れたが、ワークショップ自体は、参加者は、1週間の期間内で毎日その日の援助行動について行動したことや気づきを LINE 上にて自由記述で記載するチャレンジワークショップも実施している。このチャレンジワークショップは、中西 (2017) の分類に則ると、自然観察調査・アンケート調査・内省調査の複合形だが、言語行動調査方法としては分類の一つとしてまだ挙げられていない「日記調査法」と言えると考えられ、ここについては更なる検証を行なっていく。

**謝辞** 本研究ならびにワークショップ開発においては、京都芸術大学早川教授、浅井准教授からの惜しみないご指導ご鞭撻、共同研究者であり同大学研究員の青山氏の多大なるご協力を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 小林隆、澤村美幸 (2014) . ものの言いかた西東 岩波新書, 171
- 中西太郎 (2017) . 言語行動の方言学 ひつじ書房, 339-408
- 荻野綱男 (2003) . 言語行動の調査法 朝倉日本語講座9 言語行動, 朝倉書店, 215-240
- 渋谷勝己 (2003) . 言語行動の研究史 朝倉日本語講座9 言語行動, 朝倉書店, 241-261
- 小林隆 (編) (2018) . コミュニケーションの方言学 ひつじ書房
- 渡辺 匠, 唐沢 かおり (2013) 共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討 心理学研究, 84, 1, 20-27
- 吉岡泰夫 (2004) . コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライトネスの地域差・世代差 : 首都圏と大阪のネイティブ話者比較 社会言語学, 92-104
- 井上文子 (編) (2014) . 方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書 国立国語研究所